

「自治」の観点から見た「カナン＝パレスチナ＝イスラエル」の歴史

自治とは、大事なこと、つまり自らの存在にかかわることを自ら決定し実行できることです。人間らしく存在するには、自治を実現・保持できることが必須です。それは、民族レベルにおいても、市民レベルにおいても同様です。そのような問題意識をもって「カナン＝パレスチナ＝イスラエル」の歴史を概観いたします。

▽もともとユーフラテス川上流の山岳地帯で遊牧していたユダヤ民族※は父祖の地を放棄して、前1500年頃、**カナン**(現「パレスチナ＝イスラエル」の古名)に移住して先住民族の**カナン人**(**フェニキア人**とする説が有力)を支配・同化・駆逐した(ユダヤ民族は、**自らの自治実現のために他民族の自治奪う**)。

※当時ユダヤ民族は、移住民という意の**ヘブライ人**と呼ばれた。

▽ユダヤ民族は、カナンが飢饉に見舞われたときカナンを放棄してエジプト新王国へ移住。しかし圧政(奴隷化)を受けた(ユダヤ民族は**自治実現できず**)。そこで、前13世紀頃に、預言者モーゼに率いられカナンへ脱出した(出エジプト)。その途中、シナイ山で十戒を授けられた。

▽カナンに再移住したユダヤ民族は、彼らがカナンを放棄している間にその沿岸地方に定着していた**ペリシテ人**※と抗争(ユダヤ民族は**自らの自治再実現のために他民族の自治否定**)。ユダヤ民族は、カナンに再移住・定着した頃に彼らの言語であるヘブライ語を**カナン人の言葉を取り入れて**成立させ、この頃から、**イスラエル人**を自称するようになった(ヘブライ語でイスラは「戦う・秘密」、エルは「神」を意味する)。

※ペリシテ人：前13世紀から前12世紀にかけて地中海東部一帯で活動した「海の民」と呼ばれる諸集団の一派/前4世紀のアレクサンドロス大王のオリエン特統一のころに姿消す。のち、ローマは、**ユダヤ**と呼ばれるようになっていたカナンの地からユダヤ性を奪うために、かつてユダヤ民族に敵対した(ユダヤ民族のカナンへの再移住を認めない戦いを続けた)ペリシテ人にちなんでユダヤを**パレスチナ**(「ペリシテ人の土地」という意)と改名する。

▽前1000年頃、ユダヤ民族の王国が成立(ユダヤ民族はペリシテ人という**他民族の自治は否定しながらも自らの自治は実現・保持**)：最盛期の王はダビデ王・ソロモン王で、都はエルサレム。

▽ソロモン王の死後、前922年に王国は南北に分裂(ユダヤ民族は分裂・民族内抗争で**自治再喪失の危機を招く**)

北：イスラエル王国(都はサマリア)…前722年にアッシリアに征服される(ユダヤ民族は**自治再喪失**)。

南：ユダ王国(都はエルサレム)…前587年にバビロニアに征服され、人々はその首都バビロンに強制移住させられた(バビロン捕囚/ユダヤ民族は**自治再喪失**)。のち前538年、オリエン特を統一したペルシア帝国に解放されて帰国した(ユダヤ民族は**自治回復**)<☆>。

ユダ王国が滅亡したとき、ユダヤ民族はユダ王国の遺民という意味で**ユダヤ人**と呼ばれるようになった。

▽以上のようなユダヤ民族の「苦難」の歴史の中で民族の救い・団結をめざすものとしてユダヤ教が、ゾロアスター教の影響を受けつつ生まれてき、<☆>ののち、バビロニアにより破壊されていたエルサレムの神殿が再興され、十戒を基本とする戒律や儀式の規則が定められるなどして成立していった。ユダヤ民族は**ユダヤ教徒**となった。

▽ペルシア帝国によるオリエン特統一支配時代には、その寛容な異民族統治政策(各民族の信仰・慣習の尊重、自治許容)のもとで、ユダヤ教徒は自治を維持した(ユダヤ教徒は**他民族支配を受けつつも自治保持**)。

▽ペルシア帝国を滅ぼしたアレクサンドロス大王の帝国支配、その崩壊後のセレウコス朝支配、それを滅ぼしたローマ人による支配の時代には、ユダヤ教徒は一時いっときを除いて自治は認められなかった(ユダヤ教徒は**再び自治喪失**)。

▽ユダヤ教徒は自治回復をめざして2回にわたり大規模反乱(66～70年・132～135年)を断行。しかし、「廃墟をつくり(他民族の自治の完全破壊)、それを平和と呼んだ」ローマ帝国により鎮圧された。エルサレムは荒廃し、神殿も破壊されて西壁のみが残った(これが有名な「嘆きの壁」である)。以後、ユダヤ教徒の多くはヨーロッパを中心に世界各国へ移住して離散し、各地で自治獲得をめざしていった(ユダヤ教徒は、世界各地に定着し、**各地で自治獲得を**

めざす「離散の民」となる)。

▽395年のローマ帝国分裂後は東ローマ帝国が、その縮小後はイスラム諸王朝が「パレスチナ=イスラエル」を支配した。その過程で、この地は**パレスチナ人(パレスチナのアラブ民族)**※の居住地となった。

※**アラブ民族**の形成：古来、オリエント<ペルシア(現イランの古名)~メソポタミア(現イラク付近一帯の古名)~小アジア(現トルコの古名)~地中海東海岸(その南半分の古名がカナン)~エジプト>と北アフリカには、インド=ヨーロッパ語族、ハム語族・セム語族に属する民族が主に居住していたが、7世紀にイスラム教が興って拡大し、オリエントと北アフリカでは、諸民族がことごとくイスラム教に改宗することでイスラム世界が形成されていった。その過程で、インド=ヨーロッパ語族に属すイラン人をのぞいて、ハム語族に属すエジプト人とセム語族に属す諸民族はアラブ民族(イスラム教の聖典であるコーランを記した言語であるアラビア語を使用し、アラビア語でものを考え、それで理解が成立する人々のこと。イスラム教徒が多いが、キリスト教徒も少数ながらいる。)という一つの民族に統一されていった。しかし、ユダヤ教徒だけはセム語族に属する民族であるにもかかわらず「離散の民」であったため、ハム語族・セム語族に属する諸民族のアラブ民族への統一に加わることがなかった。なお、イラン民族もイスラム教に改宗し、アルタイ語族に属すトルコ民族もイスラム教を受け入れながら東方から移動してきて11世紀に小アジアに定着した。

▽アラビア半島の一角で起こったイスラム教勢力が広大なイスラム世界を形成し得たのはなぜか。その理由は彼らの勢力拡大のやり方にある。それは「コーランか(つまり、イスラム教に改宗すれば自治を認め、年金など各種の利益を与える)、納税か(つまり、イスラム教に改宗しなくても「きちんと納税する=反抗しない」のであれば従来の信仰を保持するなど自治を認める)、剣か(つまり、イスラム教に改宗せず「納税もしない=反抗する」のであれば残念ながらジハードする。つまり、「自治は認めない=武力制圧する)」というものであった。かかるやり方のため、多くの諸民族は抵抗もせずにイスラム教勢力下に入っていった。このように、イスラム教勢力は異教徒に寛大であったため、エルサレムでは、この地に残っていたユダヤ教徒のコミュニティが復活し(イスラム世界ではユダヤ教徒は自治を回復できた)、キリスト教徒巡礼者の自由も保障され、やがて、各宗教のコミュニティ毎の棲み分けができ、エルサレムは国際都市(異なる勢力・民族が「共存する=自治を認め合う」都市)として発展した。そのことを今に伝えているのが、「現在のエルサレム旧市街」(右図)である。



<http://homepage2.nifty.com/hashim/israel/jerusalemmap.htm> より

▽一方、ローマ帝国分裂の頃に中世に入った**ヨーロッパ**

(キリスト教世界)では、ユダヤ教徒は自治を実現することは不可能であった。なぜなら、カトリック教会はその支配を強めるために、ユダヤ教徒は「イエス殺し」として、これに対する反感・差別を民衆の間に広め、ユダヤ教徒を迫害したからである(注)。十字軍の時代には、イスラム教徒に対してと同様にユダヤ教徒やカトリック以外のキリスト教徒に対する憎悪も高められ、大量殺戮も行われた(のちにナチスがやることを既に十字軍が行っていたのである。ナチスは決してヨーロッパの突然変異ではない)。商業が発達してくると、土地保有を許されていなかったが故に商業に力を持っていたということが、また、利子徴収に否定的なキリスト教を背景に人々に忌避されていた金融に力を持っていたということが、ユダヤ教徒に対する反発を助長した。

▽フランス革命以降、ヨーロッパでは、共通の文化的アイデンティティをもつ「国民」を基盤とする国民国家化が進んだ。その過程でユダヤ教徒は排除され、各地に住むユダヤ教徒は「ユダヤ人」という単一の民族だとされていった(これにより、ヨーロッパのユダヤ教徒は「ユダヤ人」というアイデンティティを取り込み、「ユダヤ人は一つの民族であり独立した国家を持つべきだ」とイスラエル建国運動に結びつけていった。また、アラブ世界のユダヤ教徒も「アラブ系ユダヤ教徒」ではなく「ユダヤ人」と上書きされていった)。そして、資本主義の発展段階において、ユ

ダヤ人は貨幣流通の担い手となって資本主義の推進者となり、あまり現金を手にする事のない農民や手工業者から目端めはしがきいて創造的力を持つユダヤ人は怨嗟えんさの対象となった。19世紀に入り、資本主義の発達に伴う階級対立激化の中で、資本主義諸国の支配層は人々の不満をそらすためにユダヤ人に対する差別・反感を助長し利用したので、それは強められていった。このような動きの顕著な表れが1894年のドレフュス事件であり、また、その頂点として、やがてナチスによるユダヤ人大量虐殺が起こる。

(注)第2ミレニアム最後の2000年3月12日、バチカンのサン=ピエトロ寺院でローマ法王ヨハネ=パウロ2世による過去2000年を振り返ってカトリック教会の過ちを認める贖罪ミサが開かれ、法王は「先住民族の強制的改宗」・「異端審問」・「十字軍遠征などの暴力と非寛容」・「キリスト教会の分裂」・「女性や少数民族や他宗教の人々の人権軽視」などと共に「反ユダヤ主義」について神の許しを祈り、謝罪を初めて公けにした。

▽以上のような、**ヨーロッパ各地においては自治を実現・保持できなかった**という状況を歴史的背景として、「ユダヤ人は、(これまでパレスチナと呼ばれてきた) **イスラエルの地**に自分たちの国をつくろう」というシオニズム運動※が起こり、スイスのバーゼルでの第1回世界シオニスト大会(1897)でシオニズム運動が決議された。

※シオン：もともとはエルサレム市街の丘の名であるが、エルサレム、さらには、イスラエルの代名詞となった。

▽しかし、「パレスチナ=イスラエル」にはパレスチナ人(パレスチナに住むアラブ人)が居住しており、そこに強引に入り込もうという考えは、当時ヨーロッパを覆っていた帝国主義思想(自民族の利益のためには他民族の自治を否定しても構わない・やむを得ないとする考え)の表れの1つとなった。その後、シオニズム運動は、アラブ地域(油田地帯)を支配下におこうとする帝国主義諸国(第1次世界大戦~第2次世界大戦にかけてはイギリス、第2次世界大戦以後はアメリカ)の支援を受けて強引に推進されていった。これは、ユダヤ人にとっては**自治を獲得**することであったが、パレスチナ人にとっては**自治を破壊される**ことであった。

(以上)

<追伸1>エルサレムでは、その旧市街が今も示しているように異なる勢力・民族が「共存=自治を互いに承認」してきました。しかし、現在の「パレスチナ=イスラエル」では、異なる勢力・民族が「共存=自治を互いに承認」している状態とはなっていません。なぜか。シオニズム運動が帝国主義的なやり方(「土地のない人」に「人のいない土地」を、ではなく、「土地のない人」に「人のいる土地」を)で行なわれたからです。シオニズム運動は当初は「土地のない人に人のいない土地を」というやり方で行なおうという意見もありましたが、結局はそうはなりませんでした。ユダヤ民族の建国運動が不幸をもたらした原因は、帝国主義的なやり方で行なわれたからです。かつて日本人も海外移民を行なったことがあります。ブラジルへの移民と満州・朝鮮への移民です。前者は「土地のない人に人のいない土地を」、後者は「土地のない人に人のいる土地を」というやり方で行なわれたので、結局、前者は幸福を、後者は不幸をもたらしました。

<追伸2>ユダヤ人の建国運動が本格化に開始されたのはドレフュス事件(1894)・第1回世界シオニスト大会(1897)からです。世界的にはこのころから帝国主義が展開していきます。つまり、ユダヤ人の建国運動は帝国主義の展開と共に起こられました。この時期、帝国主義諸国は世界分割支配と世界支配主導権をめぐる争い、2回にわたり世界大戦を引き起こしました。こんな中でのユダヤ人の建国運動はシオニズム運動(帝国主義的な建国運動)とならざるを得ませんでした。帝国主義時代以前のイスラム世界ではユダヤ人は自治を回復できました。帝国主義時代以前にユダヤ人の建国運動が行われていたならば、それはシオニズム運動とはなっていませんでした。帝国主義諸国の責任には重いものがあります。しかし、日本は2回にわたる世界大戦を阻止できなかったことを反省し、憲法第9条(武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。この目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。)を掲げるに至りました。このように「異なる勢力・民族が殺し合いをせずに共存していく道」を示す憲法第9条の国たる日本は、パレスチナ問題解決に大きく貢献できるはずです。

<追伸3>イスラエル建国後の歴史については下記URL(クリックしてください)の記事をご参照ください。